
白の鬼が唄う刻

くーやん屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の鬼が唄う刻

【Nコード】

N 8 6 3 6 X

【作者名】

くーやん屋

【あらすじ】

普通の人には見えない者が見える少年がとある島へと引っ越してきた。

だがその島は少しばかり特殊な島で……。

鬼と人が織り成す不思議物語です。

注 『白い少女』の中で主人公の台詞の中に「夏の終わり」という

ものがありますが本当は「夏の真っ只中」です。
誠にすみません？

ブローグ

俺、灰原銀次が新たにたらい回されてきた場所。それは交通の便もあまりよくない海に囲まれた大島の田舎だった。

村とも呼べるそこには一応は学校があり、住宅地があり、商店街があり、決して悪い環境じゃない。むしろ快適だ。と、ここに来る前に聞かされた。

俺のことを想って言ったんじゃない。自分を正当化させるために言っただ。

いい所に住めるんだから自分には別に後腐れは無いんだと。それくらい俺にだってわかる。

だが、俺にとって生活環境が良いとか悪いとかは関係無いことだった。

ただ居場所となるものが欲しかったんだ。

自分はここに居てもいいと思える場所。

そう言ってもらえる場所。

それを今度こそ手に入れてやる！とか、そんな熱い意気込みを持ち合わせることもなく。

またどうせ厄介者と思われるんだろうと期待を破棄し、一人荷物を持ってこの村へとやって来た。

自分でもひねくれた性格してるって思う。

だが、これくらいにならないと…こうならないと、『いらない奴』というレッテルに負けてしまいそうになる。

だから隠す。

自分の色んなものを。

心の奥底に押し込んで、また今日から生きていくしかないんだ。それが俺の人生であり、道の歩き方なんだから。

白い少女

港を出ると草木の匂いが身体を包んだ。

もう世間では夏休み中頃の8月5日。港を少し歩いた辺りにはデパートなどもあり栄えているが、周りを海と山々に囲まれたここ雪乃原町は田舎独特の夏の様相を物凄く体感させる。

ここは盆地っぽいからたぶん暑さが残るんじゃないだろうか。

地図を見ながら田園風景広がる舗装された道を進む。港から大分歩いた所に商店街があった。時間にして30分くらい。

さすがは田舎：と言うかデカイ島だと思ってしまう。今まではそこそこ都会に住んでたから余計にそうだ。

これから世話になるのは百々原家。

ここでは中心的立場と言えるほどの名家らしい。

地図によると商店街のさらに先に田舎道が続き、その先に点々として民家が存在している。百々原家はその中でも広大な土地を所有しているみたいだ。

大体の場所や地形は理解できた。向こうをさっさと出てきたから到着する時間よりも随分今は早い。

少しぶらついてみるとしよう。

商店街は一通りの物が揃っている。生活の必需品はここで揃いそう。客足もあるしなかなか栄えている。だがやっぱり港辺りの方が華があるよな。交通の便が良くなればいずれは向こうがメインになるのかもしれない。

少し歩くと人だかりが見えてきた。そこだけ異様に騒がしく、それ

も主婦層ばかりがいる。

魚屋だ。

聞こえてくる声から特売をやっているらしい。

その喧騒の中に異質な存在を見つけた。

白い絹のような長い髪をなびかせた女の子が主婦達の周りを行ったり来たりしている。背の低さからして小学校高学年くらいだろう。今時の子にしては珍しく紫を基調とした和服を着流した姿だ。緋色の帯は背で適当に結ばれている。

そんな子供が時折跳ねたりもしながらウロチョロしていた。

でもなんかおかしい。

いくら特売に夢中でもあんな子がいたら何人が気付くはずなんだが。なんでだ？一方の俺と言え、いつもなら完全にスルーな光景をいつまでも見ている。そうしている自分を不思議に思った。

女の子は二度ほど大きく跳ねると何か感づいたのかキツネみたいな耳を立てて…キツネみたいな耳だと？

なんであの子にそんなのがついてんの？そしてなんで皆さん気づかないんだよ？

女の子が耳を動かして辺りを見回す。

「……………っ！！」

はたと目が合った。

俺に対して耳をピンと立てて警戒してるみたいだ。まるで野生の動物に威嚇されているような気分である。

その子はしばらく俺を睨むとトコトコと去って行ってしまった。

「なんだってんだ？」

独り言をばやきつつ商店街を抜ける道を進んだ。たぶんこの道はあの子が逃げてった方向と同じかもしれない。もうどっか行ってるだろうけど。

商店街から数分も経たずに畑や田園が広がる田舎道になった。山間にある村のような感じで、ここだけ現代から取り残されて昭和時代そのままなのかと錯覚する。だが、点々として建っている民家は和風のものもあれば、現代風のものもある。時代がかき混ぜられたかのような光景だ。人もそれなりに居て時々挨拶もしてくれる。見ない顔だと物珍しがるところもあるが、余所者を拒絶すると言ったことはないようだ。少し安心した。

垣根が囲む民家の側を歩いていると先程の和服少女が天を仰いで立ち止まっていた。やはり白いキツネのような耳がある。目線を追ってみると民家の柿の木が垣根を越えて道に出ており、いくつか実をつけていた。

なるほど。柿を食べたいのかもしれない。だが、あの子の身長じゃ取れない。

跳ねてるけど取れない。

今気づいたが、なんかこうしてると俺は一種の危ない奴になってるんじゃないだろうか。隠れて見てるとか完全にストーカーだし。そもそも隠れる必要なんてないじゃないか。俺はただの通りすがりであり、通行人Aなんだ。さっさと通り抜けて他の所を見て回ろう。

一本道になっているためあの子の近くしか通れない。

気持ち足早に和服少女の隣を通り抜けようと歩く。するとさすがに気付き目を丸くしたがすぐに威嚇してきた。やはり動物みたいな威嚇。だが、ただの通行人Aである俺は無視だ。

何の反応も見せない俺に違和感を覚えたのか和服少女は、あれ？おかしいぞ？てな感じで首を傾げる。

距離も近くなった所であっちから近づいて来た。俺の前で跳ねたり手を振ったりしてくるが無視。反応が無くて戸惑っているのが目に見えてわかる。

ちよつと動きが子供らしくて可愛らしいと思ってしまったのは嘘じゃない。吹き出すのを我慢するのは苦しいんだからな。

そろそろ話し掛けてもいいだろ。俺ももう限界だし。笑っちまいそう。

「何してんの？」

「……………っ!!」

「じぼあっ!？」

こちらが話し掛けた途端に獣耳がピンと立って走り去ってしまった。俺の腹に頭突きをかましてから。

いつつ……………びっくりさせちまったかな。

攻撃してくるとは。

思わず膝をついてしまっていた。

「あらあら、大丈夫？具合でも悪い？」

不意に掛けられた声に振り向く。初老の女性がいた。

「あつ、はい。大丈夫です」

「ここらじゃ見かけない子だね？」

「今日こつちに引越して来たんで。それにしてもこれ柿の木ですよ？俺はじめて見ました」

「あらそう？都会から来たのね。この柿の木はね、亡くなった夫が若い頃植えてくれたの。思い出の木なのよ」

「じゃあ大切な柿の木なんですね。立派な木だと思いますよ」

俺も口がうまくなったもんだ。

「そう？ありがとね。そうだね、せっかくだから」

と言うわけでちゃっかり柿を四つほど貰えた。あのお婆さん、吉田さんはとても優しい人だなあと思えました。作文的だなあ。

そこそこ民家がある道を行くとその外れに鳥居と石階段見つけた。山を登っていくこの階段を上った先には神社があるのかもしれない。階段の上からはより一層セミの鳴き声が聞こえてくる。知的好奇心というわけでもなく、ただ単に自然な行動で足が向いた。よくそついうことあるじゃん？

石段を登っていくと木々に囲まれた境内があった。言うなれば緑のトンネルの境内と言ったところか。

自分の詩的センスの無さに後悔。

境内の先に社があり、そこに何が祀られているのか知らないが御供えとして饅頭が置かれている。近寄ろうとすると物陰から白いのが社に躍り出て来た。また見かけるとは思わなかったが、またあの白髪の子だ。こうなると俺で遊んでんじゃないかと思えてくる。

そもそもあの子の耳は何なんだろ？ 獣耳のアクセサリーでも着けるのだろうか？

白髪の和服少女はしばらく御供えを見つめると、素早く取って社の裏へ駆けて行ってしまった。

まったく、なんて子だろうか。御供えを盗むのはいけない。いくら子供の悪戯でもこれはマズイことだ。

他の人に叱られる前に注意した方がいいだろ。

俺は追いかけるようにして社の裏手に走った。

ぶよん。

「——っ！ な、なんだ!？」

今何か変な感じがした。

まるでゼリー状の膜を通り抜けたような違和感があった。

その違和感に目を瞑ってしまい、次に見た光景に絶句する。

こんなことがあるんだろうか。俺はさっきまで木々に囲まれた場所にいたはず。なのに今目の前に広がっているのは池。湖と言えるほ

ど大きくないがそこそこ大きいから池が妥当だろう。教科書に載ってる平安時代とかの庭園にある池を想像していただきたい。貴族とかが船を浮かべて、いと愉快でおじゃる、とかほざいてそんなアレだ。

池には小島があり木製の赤を基調とした風流な橋で陸と繋がっていて、小島の中心には祭殿が厳かに建てられている。

なんとなく神秘的で自然と足が動く。祭殿に屋根らしいものはない。火を灯すための台だけが四方に置かれていただけだ。

——っ！？

『お前には何が正しいのか決められるのか？』

『逃げるのはもう…疲れたよ』

『諦めらんねっしょ。ここまでコケにされてよ』

何かの映像と音が頭の中を流れる。ここ来たことないのに見たことがあるような。

妙な既視感があった。

なんとなく気持ち悪い。

当然俺はこの町には初めて来たし、この光景を見たのも初めてだ。

それよりここから帰れるんだよな俺？変なところに入ってしまったという焦りが今更になって出てきた。
そこへ——。

「うがあああああ！」

奇声と一緒に白と紫の何かが水平に飛んできた。

「ああああ——ぶぎゅっ」

つい右足を出して止めてしまった。足は飛んで来た何かにめり込む。その何かは獣耳で和服なあの子であった。

「あっ……」

顔面に右足が入っていた。

パタリと和服少女は地面に倒れ伏す。

ヤバイと思ったね。

泣かれたりしたら面倒だ。

「だ、大丈夫か!？」

「ぐ……ぬぬうおお……」

和服少女は両手で顔を覆いながら悶絶していた。
痛そうだ。

そして顔を上げると涙目ながら親の仇を見るように睨み付けてきた。

「お、おのれ…人間ごときがわたしに痛い一撃を喰らわすとは…っ
！」

人間ごときと言う辺り頭の痛い子なのかもしれない。

和服少女がふらふらと立ち上がるとその瞳がルビーのように澄んだ
紅い色をしてるのに気がつく。髪が白い分際立ち、こう言うのは柄
じゃないけどその瞳の色を美しいとさえ思えた。

「フハハハ！愚かなる人の子よ。わたしに会ったことを後悔しろ！お前を贄として食ってやるわ！」

ぺしっ。

そう言つて飛び掛かつてきたので冷静に手刀で打ち落とす。さっきと同じ格好で倒れ伏した少女。額の少し上に当てたから怪我は無いはずだ。

「ぎよおおおっ！」

奇妙な声を出して足をばたつかせてる。ホントにおかしな子だ。

「い…痛い…このお…」

「わ、悪い。飛び掛かって来たからつい」

悪ガキの悪戯に対して少しやり過ぎたことを反省していると、少女の後ろに白いふわふわしたものがあのに気付く。今まで和服の中に隠れていて分からなかった。

まさか、これは尻尾…か？

もちろん普通の人間には尻尾なんてあるはずがない。アクセサリーの類いであると考えられる。

尻尾に触りたい衝動をなんとか抑えて（変態かよ）手を貸そうとすると払い退けられた。

「お前の手など借りなくても自分で立てるわ！」

相当嫌われたらしい。

ふむ、ここはご機嫌を取るために餌を出してみよう。ちょうど良いところにもらった柿があるし。

「なあ、柿食べるか？さつきずっと眺めてたっばいけど。そこで貰ったんだ」

鞆から柿を取り出しながら尋ねる。

「え？うえ…うう…ふ、ふんっ！人間の施しなんか受けぬ！」

「じゃあ、いらないんだ？」

「いただきます！」

割りと素直な子らしい。

一番大きな柿を池で洗ってから渡す。すると一変して嬉しそうに受け取った。一段高くなっている祭殿に腰掛けて食べ始める和服少女の隣に腰掛ける。

池は本当に静かで微かな風を感じるくらいだ。ここだけ時間が止まっている。そんな錯覚さえ覚えた。でも携帯の時計は進んでいる。

「そつだ。お前ね」

「ん？なんだ？」

「御供え物を勝手に取っちゃダメだって。バチが当たるぞ」

「ふん」

注意するも澄ました顔で彼女は柿を食べる。

「やっぱバチとか言っても現代じゃ脅しにもならないよなあ。俺もそうだったみたいに神様とか信じてないだろう。」

「バチなんか当たらん。あそこの神は少し前からもう居ないからな」
神様を信じてるのか？

「居ない？でも御供えはしてあったじゃないか」

「それは馬鹿な人間が勝手にやってることよ。わたしは勿体無いと思っただけだ。食べ物を粗末にできんからな」

子供なりの言い訳だな。

御供えはある意味食べ物を粗末にすることだから一理あるが、道徳的に……いや、俺が道徳とか考えても意味ない。

「そうだな。食べ物を粗末にしちゃいけないよな」

柿を食べ終えた彼女は、うんうんと頷きながら手の平を舐めていた。

「まふゆ真冬だ」

「あ？今は夏終わりだ」

「真冬！真の冬と書いて真冬！わたしの名だ」

「あ、ああ…そなの？」

自己紹介をされるいわれはないんだが。

「……………」

何かを待っているかのような真冬という名の子。

「……………なに？」

「お前の名だ！」

「俺？俺の名前なんて知ってたってしょうがないだろ」

「柿をくれた者の名くらい知ってたっていいだろ！わたしの勝手だ！」

紅い瞳が間近にある。

たぶんそれはコンタクトレンズとかじゃない。この子自身の瞳の色だ。

「お前……ヒトか？」

たぶんショッキングな質問だと言ってから気付いた。

「そんなわけないだろ」

即座に否定してくれる。

「お前ら人間と一緒にするな。わたしは――」

俺は彼女…いや、真冬を近所の悪ガキとして見ようとしていた。だけれどやはりなんか違うのかもしれないと言う疑念も大半を占めていた。それでも結局耳を疑いたくなかった。

「鬼だ」

真冬がそう言ったのだ。

聞き間違いは無かったとは思う。やはりこの子はそうなんだな。

「真冬…お前って、頭の痛い子なんだな」

「わかるぞ！なんか馬鹿にしてるな！」

「いや、だって…現代社会に鬼って…ハッ」

「鼻で笑ったな！？食い殺してやる！」

「イテッ！？痛いって！腕を噛むな！」

俺の腕を取ってかぶり付く真冬。犬歯が刺さってる箇所がマジに痛いんだよ。

「あむうつうつう！」

「わかった！わかったから離してくれ！」

「ならお前の名を真冬に教える！」

「ぎ、銀次だ！灰原銀次だよ！」

噛む力が緩み腕を引く。痛々しく歯形くつきりと付いていた。酷いなあ。

「ギンジってどう書くん？」

「銀に次って書く」

「そうかそうか！喜べ！これからよろしくしてやるぞ銀——っ！？」

急に真冬の雰囲気が変わった。耳が忙しく動き、猫の瞳のように細くなった鋭い眼光で辺りを睨み付け、まるで野生の動物が天敵の存在に警戒しているようである。何故に飾りである獣耳が動いているのかと訊くことができない緊迫感。真冬は確かに何かを感じ取っていた。

「急にどうし——っおっ！」

俺の袖を掴みいきなり走り出した。祭壇から飛び出し橋を走り抜け林の藪に飛び込む。

「ど…どうしたんだ？」

「黙れ、気付かれたら食い殺されるぞ」

小声で何を言ってるんだろうか？

袖をぎゅっと掴んで離さない真冬は池の方を睨み興奮しているようだった。

真冬から池の方へ目を移すが何もない。ん？いや、なんか…来た？

な…なんだあれは！？池の奥にある森の中から巨体な何かが姿を現した。赤黒い八本の足とデカイ図体。巨大な牙を剥き出しにした頭らしい部分。それはデカイ蜘蛛の化物。その化物が俺がいた小島まで進んで行く。

「あ…あれは？」

「静かにしろ！お前が見つかったらすぐ食われてしまうぞ」

蜘蛛の化物は祭壇辺りを徘徊して何かを探ってるようにも見える。

「お前の匂いを嗅ぎ付けて来たんだ。逃げるぞ」

腕を引かれて早足でそこを離れのだった。

騒がしき朝

携帯のアラームと振動で目を覚ますと周りは真っ暗だった。シンと静まり返り聞こえるのは自分の呼吸音だけ。だがそれでいて心地好さと安心感が身を包み、再び瞼が落ちそうになる。そう。ここは俺の安息の地エデン。要は自分の布団のなかである。

アラームを止めて布団から這い出る。昔ながらの畳みの部屋だった。百々原家は遠い昔から続く名家らしく伝統的な和風の家である。初めに見た感想は「でかつ」だった。

世話になっているここでは朝食がいつも決まった時間に出される。別に朝飯を抜かしたからって支障はないが、いきなり食べなかつたら感じが悪い奴になってしまう。三日前に来たばかりでそれだけは避けたい。

……そう、三日前なんだ。

自称鬼である真冬に会い、不思議空間に行き、蜘蛛の化物を見たのは。

はつきり言おう。

あれは夢であると。そうだと、夢だ。あんなことが現実にあつちやいけない。睡眠中の俺の脳がちよっぴりハッピーなことになつただけなんだ。そうに違いないさ。

自分の中で決着を付けながら窓を明ける。着替えようと枕元の服に手を掛けると部屋の外から誰かが走ってくる音がしてきた。

朝から騒がしいもんだ。

襖を開けて中庭に出ることのできる広く長い廊下に半身ほど出てみると、足音は明確なものになった。と言うか、近づいて来てんね。

「うぎゃああああ！」

「待てえ！小鬼があああ！」

最近聞いたことある声の悲鳴と怒鳴り声。廊下の先に目を向けると小さな白い影が突っ走って来た。

自称鬼の真冬だ。

夢であって欲しかった。避けたい現実が近づいて来るではありませんか。

「銀次いつ！」

真冬は気付くと俺の背後に回って部屋に入ってきた。

「助けてくれ銀次！」

「銀次っ！そこを離れろ！」

助けを求める真冬を追い回してたのはきつさきかなで雉崎奏。三日前に会ったセミロングの綺麗な黒髪が印象的な女の子だ。俺と同じようにここでお世話になっている人らしい。

幼い頃かららしいから俺の先輩…なのか？

歳は俺と同じで違うのは日本刀を所持していること。銃刀法違反じゃないか？

「か、奏さんどうしたんスカ？朝から物騒なもん振り回して」

「いいからどけ！そこは危険だ！」

危険なのはあんただ。子供相手に何を振り回してんだよ。さて、どうするか…。

「危険と言うのは刀を構えた奏さんがですか？」

「い、いや、そう言うわけではなくて…だな。とにかくそこは危ないんだ！」

「そこと言われても、俺の部屋ですが…。あつ、確かに女の子にとって男の部屋は危ないツスよね」

「ちちち違う！そそ、そう言う意味じゃなくてだな！わ、私が言いたいのはだな！」

顔を真っ赤にして可愛いじゃないですか。刀をふらふらさせてなきや尚更良い。危ないんだよそれ。

「い、いいから部屋から出る！」

「俺これから着替えるところなんですけど」

「き、着替えっ！？」

ボソツと擬音を付けてたくなるほど頬を紅らめた。まあまあ年頃の女の子ってやつですな。

袖を引っ張られる感覚がした。いつのまにか真冬が背中中に隠れて袖を握っていたのだ。奏さんを警戒してるようである。

そりゃあ、あんな危ないもん振り回して追いかけられたらなあ。

「くっ！？御免！」

奏さんは素早く俺の回り込むと刀を振り上げる。

これは…！？

「危ねええっ！」

真冬を抱えて刀の軌道から外す。刃が真冬のいた空間を素通りし、風を切る音が鳴った。

「な…なあっ！？」

刀を振り下ろしたまま奏さんは目を丸くしていた。

「銀次？お前…そいつが見えてる、のか？」

「え…ええ、まあ…」

「だ、だとしてもだ。何故庇うような真似を…」

「えっとお…一応こいつ、俺の知り合い…です」

「知り合いい！？」

たぶん初めて黒船を見た江戸時代の人並みに驚いているだろう。江戸時代の人を知らないけどさ。

「そうだっ！残念だったな人間の女！わたしと銀次はすでに名を明

かし合つた仲なのだ！」

「なんだと！？本当なのか銀次！」

「名前を教えはしましたけどね。アカンですか？」

額に手を当てて奏さんは首を振ってくれやがった。

「おい、小鬼。貴様と銀次の契約における取り決めはなんだ？」

「教えん」

「吐け！さもないと叩斬るぞっ！！」

そう言つて奏さんは刀を構える。

「ふんっ！斬れるものなら斬ってみろ！」

「ぐっ…銀次！どんな取り決めをした！」

はて？そんなことを決めただろうか？いや、してないよな。

「してないはずですけどね」

うん、してない。

「はあ！？」

不可解だとも言いたそうな顔をされる。

「ハッ！…しまっ…たあ…」

真冬は真冬で微かに聴こえるくらいの声でそう呟いていた。

「じゃあ、取り決めをしてないってことは契約も無いってことだな？」

契約って何よ？

「してる！」と真冬。

「どうなんだ銀次！」

「そんな事実はありませんぜ、姉御」

「ごすっ！」

「誰が姉御だっ！？」

奏さんに頬を殴られた。

「と言うかですね。こんな子供を刀振り回して追いかけるってどうなんですか？あと、鬼とか契約とか、この町は中二的なものが流行ってるの？」

「は？えっ！？銀次、お前は…。……ああ、そうか。そういう認識なんだな」

奏さんはなんか納得したみたいで刀を下ろした。そして真冬を貫くかのように睨み付ける。あまりの迫力に唾を飲み込む。

「銀次、これから話すことはすべて聞き流せ。お前には関係の無いことだ」

一方的にそう言つと刀身を再び真冬に向ける。

「小鬼、契約もしていないのに何故銀次のもとにやって来た？」

「ふ、ふんっ！答えてなんかやるもんか」

「言え」

「嫌だ！」

「…なら滅するだけだ」

「ひいつ！？」

刀身を目先まで突きつけられ悲鳴を漏らし俺の後ろに隠れた。俺の裾を掴んで震えてる。

おいおい…おかしいだろこれ。

「ちょ、ちよつと奏さん！ホントに何してんだよっ！あんた少しおかしいぜ！？」

「銀次には関係の無いことだと言つたはずだ」

怒気だけこもつた淡白な言い方だ。

「目の前でこんなことになつて黙つてられるかよ！そんな危ねえ

の向けんじゃねえっ！」

「そいつは銀次を殺して食うつもりだ。野良の鬼は人を食って力を増す」

また鬼とか…くそっ！認めてやるよ。そうした非現実的なものが存在してるってことをな。事実、見えないはずのものはそこら中にいる。

「真冬が俺を殺すつもりなら三日前に殺されてる！こいつは化物から俺を助けてくれたんだぞ！」

「は？…なっ！？…そんな、そんな信じられるかつ！」

「当事者の俺が言ってるんだから信じろよ！他に証拠なんてないんだからさ！」

奏さんはどういうわけか悲しい目で俺を見ると下唇を噛んで俯いた。

「だが、だがな。それでは私は——！」

「奏さん、一度落ち着きましょう」

奏さんが叫ぶように何かを言おうとしたところでその声が掛けられた。やけに清涼感のある男の声で、声の主の手が奏さんの肩に置かれている。

百々原氷華。ももはらひょうか

スマイルが似合う爽やかイケメンの優男だ。三日前に奏さん同様俺

にこのことを色々教えてくれた人だが、近くにいると男として劣等感を抱いちゃう次第である。さらに同い年なんだ。そりゃあもう劣等感三昧ですとも。
ちなみに百々原の姓を名乗っているが百々原家の血筋ではないらしい。

「……氷華」

「た、助かった。わりいな氷華」

最初に「気軽に氷華と呼んでください」と言われたから氷華と呼ぶ。奏さんを止めた辺りかなりデキルヤツかもしれない。

「いえ、何事も無くてなによりでしたよ銀次君。奏さんは少し興奮気味のようながね」

氷華は奏さんの肩を抱いて優しく話し掛ける。

「す、すまない。私としたことが取り乱すなんて」

「大丈夫ですよ奏さん。人なら誰もそんな時があります」

「ああ、ありがとう…氷華」

なにこの状況？イラッとするんだけど？じえらすいーですか？

「もう朝食の用意はできています。奏さんと銀次君もお腹を満たして頭をスッキリしましょう。あと、その可愛らしいお客様も朝食はいかがですか？」

爽やかスマイルで真冬に声を掛ける氷華。得たいの知れない小さな子にもお客様として尊重するとは憎いぜこの野郎。

百々原家には食堂のような場所がある。百々原家には仕える人が多いため設置されたい。主に使用人が利用し、俺も使用人ではないけど普通に使わせてもらっている。奏さんや氷華もここをよく利用しているようだ。

他の利用者がちらほらいる中で俺達は同じテーブルに座っていた。奏さんが俺の向かいに、氷華がその隣、真冬は俺の隣に座っている。適当に結んであった帯も今では氷華の手によってきつちりと結ばれていた。箸を使ったことが無いらしく、手で食べようとしていたところを俺が箸の使い方を教授する羽目になった。初めは四苦八苦し俺の使い方を見て真似しながら箸を“わにわに”と動かす。物覚えが良いようですぐに箸に慣れていった。

「すごいで銀次！手を汚さないで食べられる！」

新鮮な体験に感激してるみたいだ。

「なるほど。それで真冬さんは銀次君のところに来たんですね」

「何かなるほどだよ。まだこいつ何も言ってねえし」

「まだまだですね銀次君。何も言わせずとも女性の気持ちを察してあげるのが紳士としての心構えですよ」

知らねえよ。

「紳士である前に男は狼なんだよ」

「銀次は狼なのか？」

「いや、ごめん真冬。忘れて…」

若気の至りと言うヤツですね。はい。

「……わたしはただ銀次に会いに来ただけだ」

「ほお。それなら銀次君の御友人というわけですね。そういうことなら僕はいつでも歓迎しますよ」

「……？銀次に会いに来ると歓迎されるのか？」

「いえいえ、銀次君が目当てでなくてもいつでも遊びに来てください。家の者には僕から言っておきます」

氷華が優しい笑みを浮かべる。もしかしてこいつは「口」で始まって「ン」で終わる人種なのかもしれない。そんな和やかな雰囲気の中で奏さんが拳をテーブルに叩きつけた。

「おい、氷華っ！こいつは鬼だぞ！？百々原家の敷居を易々と跨がせる気か！！」

奏さん自身は気に入らないらしい。ご立腹だ。

「まあまあ奏さん。この子は害無き者ですよ」

「そんなこと分かるか！何もしでかさない可能性なんて無い！」

「奏さん…。あなたも本当は理解してるハズでは？鬼のすべてが悪であると言っわけではないことを」

「そ、それは…っ！そう、だが…」

諭すように話す氷華。泣きそうに顔を歪める奏さん。なにやら深刻なお話しになってきた。なるべく俺には当たり障りなく済んで欲しい。

「真冬さんは一見子供の姿ですが、僕らとこうして対話できる辺り上級の部類に属していると言えますね」

「その通り！氷華はわたしの凄さがわかってるみたいだな。その人間の女とは大違いだ」

真冬の言葉に奏さんは鋭く睨みつける。真冬も真っ向から対向し火花が散っているようだ。その間を氷華の腕が制して事が鎮まる。

「ですから彼女は本来の鬼の行動原理である本能の赴くままと言うわけではなく、自ら考えて行動ができるほどの知能を持っていることになります」

「それはつまり何が言いてえのよ？」

俺の質問にキザったらしいスマイルが答える。

「銀次君との関係次第ではとても良い交友関係を持てると言うことですよ」

「……………」

「おや？銀次君どうしました？」

「ああ…いや、やっぱり鬼とか現実味がなくてさ。えーと…なにか？このちつこいのがホントに鬼だって？角はどこよ？虎柄パンツは履いてんの？」

やっぱり鬼とか信じられない。一度は認めたが現代社会にはありえないことだ。完全に非現実的。オカルトじゃないか。

「銀次君の想像する鬼は幼い頃に昔話や歌で出てきたものですね。それは人が考えられる如何に強く恐ろしい鬼です。ですが、実際の鬼は形も様々、大きさも様々。真冬さんのように獣人型もいれば獣や異形の姿をしたものもあります。妖怪や魔物だと言われる類いもほとんどが鬼なんです」

「ふーん。つまりそこで奏さんとガン飛ばしあってる真冬のお仲間がたくさんいるってことか」

「仲間と言う認識が彼らに存在しているのか定かではありませんがそういうことになりますね」

「でもそれなら世間は大騒ぎになるんじゃない？。俺でさえ見たことな

——」

「銀次君でさえ…とは？」

「い、いや、何でもねえ」

危なかった。自分で言うのもなんだが軽い口で困る。余計なことを

しゃべるのは得策じゃない。

気を落ち着けようと騒いでる真冬達の方へ目を向けてみる。

「お前の髪は真っ黒だ！ホントにつまらん色だな！」

「なんだと！？黒髪は日本女性の誇り高い象徴だぞ！お前の髪こそ真っ白で年寄りみたいじゃないか！」

「絹のように綺麗なわたしの髪になんてことを！？」

ホントにどうでもいいことで喧嘩してんなあ、この子らは。

「それにしてもお前詳しいみたいだね。鬼とかそういうのに」

「ほんの幼い頃からそうしたジャンルの勉強に縁がありましたね」

「鬼にも遭ったことあるとか？」

少し馬鹿にした感じで言ってみた。

「さて、どうでしょう？」

軽く流された。

「銀次君、桃太郎という昔話をご存知ですか？」

「日本人で知らないヤツはそういないだろ」

「そうですか。それは失礼をしました。では、どういった物語ですか？」

「お前は俺を馬鹿にしてんの？桃太郎は桃から生まれた人で、村に迷惑を掛ける鬼達を家来の犬と猿とキジと一緒にこらしめるって話だろ」

「その通りです。さらに問題といきましょう。桃太郎はどこへ鬼達をこらしめに行きましたか？」

「……鬼ヶ島」

「そうですね。では、その鬼ヶ島と呼ばれる島はどこにあるんでしょうか？」

「知らないよ」

昔話なんだから実在するわけがない。

「そうです。鬼ヶ島がどこにあるかなんて誰も知らない。実際に存在する確証もない。だからこそ可能性があると思いませんか？」

「なんの？」

「どこの島にも鬼ヶ島になりえる可能性がありますよ」

そう言い切って氷華は涼しい表情で茶を啜る。

「桃太郎伝説で有力なのは岡山県、愛知県、香川県。青森にもそれに近い話が存在します。それだけ全国に桃太郎伝説は広がっているんですよ」

「その分鬼ヶ島だと言える島もあると」

「銀次君は理解が速くて助かります。ならそう考えるとどうでしょう。ここ、僕らが暮らすこの島も鬼ヶ島だという可能性があるのではないのでしょうか？」

「えらい妄想だな」

「事実、真冬さんがいるじゃないですか」

ホントに真冬が鬼だと思ってんだろうか。俺には近所の悪ガキにしか見えない。

「まだ真冬さんが鬼だと信じられていませんね？」

「そりやそうだろ。明らかにお前や奏さんのそうであって欲しいって言う偏見にしか思えない。まあ、この家の人達以外には見えないみたいだけど」

「普通はそう思いますね。ですが、彼女の紅い瞳はどう説明しますか？人間の瞳の色ではありません。あんな子がコンタクトを付けてるわけありませんし」

確かに瞳の紅い人間なんていない。

「それに彼女のキツネのような耳と尻尾。アクセサリーなどではなく、明らかに彼女自身のものです」

うーん、まあなんか尻尾とかふりふり動いてるし。

「これを彼女が人外の者で無いと言う他、どう説明できるでしょうか？彼女自身も自分を鬼だと称しています」

「……………」

論破はできそうもない。

「と、まあ…僕がそうなのではないかと勝手に思っていることを言葉にしてみたのですが」

氷華は爽やかスマイルでわざとらしく肩を竦めた。

「これは僕の妄言です。鬼は存在せず、真冬さんもまた変わった子供だと言ってしまうえば皆が納得します」

氷華は茶に口をつける。

「銀次君が言うように鬼なんてものがいたらそれこそ世間は大騒ぎです。いると豪語すればたちまち奇怪な視線を浴びることになるでしょう。だから『鬼なんかいない』と結論付ける方が賢明なんですよ」

そうして苦笑した。

なんとなく俺は氷華の言っている意味を理解してしまった。人は集団で生活するもの。それは一つの共同体として成り立ち、同じ価値観を持つようになる。それが一般常識と言うやつだ。だが、それは周りと同じ見方と感じ方ができる者達だからこそ成立するのであって、そこから逸脱するヤツは排除されてしまう。例えを言ってしまう、普通の人には見えないものが普段から見えてしまっているヤ

ツは気味悪がれ共同体から除外される。そして、それが灰原銀次である俺だ。

親も無く小さい頃の記憶もあやふや、さらに何も無い所を指差して『あの女の人は何をしてるの?』とか訊かれれば誰だって気味が悪いと忌み嫌う。それに気付いたのは小四の時でもう取り返しのつかないところまで来ていた。すでに『変なことを言う不気味な子供』という印象を覆すことが出来なくなっていたのだ。親戚と呼ばれる人達の家を転々とさせられていた理由もその頃から理解していたのだろう。つまり不気味だからいらないうわけだ。

一般常識から外れた者は共同体にはいられない。だからこそ氷華の言うように皆の納得する結論を自分にも納得させるしかないんだ。周りに見えてないものは存在していない。

結局その答えに自分を合わせるしかないんだってことだ。

「どうした銀次？」

気が付くと紅く透き通る二つの眼が目の前にあった。

「真冬、顔が近い」

真冬の顔をどけてひとつ聞いてやる。

「お前ってホントに鬼なのか？」

「当たり前だ」

当たり前でいらっしやるらしい。ならそうであればいい。非現実的でも今はこれが現実だ。氷華や奏さんも認識してるんだからそれで

いいじゃないか。鬼はいるってことで。三日前にも他の蜘蛛みたいな鬼を見たしな。言うの忘れたけど。

この日、俺は鬼はいるという非常識を常識とすることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8636x/>

白の鬼が唄う刻

2011年11月15日18時12分発行